

## 精神保健福祉援助実習前と後における学生の意識調査

### The Survey on the Change of Students by PSW Practice

宮崎まさ江\*・小片富美子\*\*・上平 忠一\*\*\*・  
藤原 正子\*\*\*\*・滝澤 秀敏\*\*\*\*\*

Masae Miyazaki Fumiko Ogata Chuichi Uwadaira  
Masako Fujiwara Hidetoshi Takizawa

#### はじめに

2004年4月、精神保健福祉の現場では、第6回精神保健福祉士国家試験合格者で有資格者となった精神保健福祉士（以下、PSW）が活動を開始する時期を迎えた。

本大学では、第2回目の国家試験からPSWを養成し、精神科医療の現場ならびに精神障害者社会復帰施設等に送り出してきた。筆者らは、これまでPSWの養成教育においては、学生の現場実習が重要であることを認識し、重視してきた<sup>1)2)</sup>。

近年、全国的にも、例えば全国社会福祉教育セミナー（2003年9月20・21日—新潟—）<sup>3)</sup>において、「社会福祉教育における精神保健福祉士養成の現状と課題」をテーマに報告が行われ、参加者による活発な論議があった。また、2003年12月には、日本精神保健福祉士養成校協会設立発会式が開催<sup>4)</sup>され、全国70大学、37一般養成施設専門学校、15短期養成施設（2003年度）における「現場実習のあり方」も、今後の課題の一つとして取り上げられ、実習教育を重視する動きが活発化している。

筆者らは、過去5年間、現場実習の段階からの「PSWの人材として期待される質的確保」<sup>5)</sup>を目指して養成教育を模索してきた。具体的には、精神保健福祉援助演習時において、学生が現場実習

に参加する前と後では、個人差があるものの、その行動面、心理面において変化・発達・成長があるという共通した印象を受け、日頃筆者らはこの点に注目し、ある種の期待感を抱いていた。しかし、その印象を明文化できなかった。

今回、その変化を実習前と後の学生の意識調査によって分析、検討することを試みた。この調査結果が、今後の学生実習指導のための一指針となり得ればと考える。

#### 対象と方法

##### <対象>

2002年度精神保健福祉援助実習Ⅰ（3年生）と同Ⅱ（4年生）、4演習クラス全員91名（3年生47名：男性21名、女性26名、4年生44名：男性22名、女性22名）を対象とした。

回答者数・率は、表1のごとく実習前94.5%、  
一表1— 回答者数・回答率

	実 習 前			実 習 後		
	男	女	計	男	女	計
演習・実習Ⅰ（3年生）	19	24	43	12	20	32
演習・実習Ⅱ（4年生）	22	21	43	19	18	37
合 計	41	45	86	31	38	69
回 答 率	94.5%			74.1%		

\*社会福祉学部講師  
\*\*社会福祉学部教授  
\*\*\*社会福祉学部教授  
\*\*\*\*福島学院大学  
\*\*\*\*\*佐久総合病院

実習後74.1%である。なお、実習後の回答者の中には春季実習者（6名）は含まれていない。

#### <方法>

無記名によるアンケート法（資料1・2）である。

アンケート項目は9項目とし、実習前と後の状況に合わせて設問⑦と⑧は表現を変えた。

この設問の基本的考えは、実習に際し、学生が通常直面するであろう具体的実践行動と心理面を知ることである。従って、平易な表現により回答しやすいよう配慮して設定した。その際、既に報告した実習行動、実習内容等<sup>1)2)</sup>を参考にした。

#### 結 果

結果は全て単純集計し、実習前と後の数値を比較し、9項目を「変化のなかった項目」、「やや変化のあった項目」、「明らかに変化のあった項目」の3群に分けて検討することとした。

#### I. 変化のなかった項目

この群は、項目①実習動機、④事前に気を遣った点、⑤自分の演習時の発言、の3項目である。

##### <実習動機>一表2a-

統計上「実習動機は明確である」は、実習前と後では変化なく71%、「明確でない」もともに27%で変化がなかった。

自由記述内容では、精神障害者の病状理解、生活のしづらさを知る、PSW業務を学ぶ、コミュニケーション・援助技術を学ぶ、病院・施設理解、地域での支援を学ぶ、就職先として知るため、自分の適性を知るため、などが多く、これらの動機内容は、実習の前と後では特に変化がなかった。

##### <事前に気を遣った点>一表2b-

実習前と後では下位項目別にみても数値上、特に変化は認められなかった。

実習前・後ともに共通して学生が気を

一表2a- 実習動機（資格取得以外の）

	演習Ⅰ（3年生）				演習Ⅱ（4年生）				合 計	
	男 性		女 性		男 性		女 性		実習前	実習後
	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後		
動機は明確である	7	5	19	10	18	17	17	13	61(71.0%)	45(71.0%)
動機は明確でない	12	4	4	6	4	2	3	5	23(27.0%)	17(27.0%)
未回答	—	—	1	1	—	—	—	—	1( — )	1( — )
「ある」「ない」両方に丸	—	—	—	—	—	—	1	—	1( — )	—
合 計	19	9	24	17	22	19	21	18	86	63

一表2b- 事前に気を遣った点

	演習Ⅰ（3年生）				演習Ⅱ（4年生）				合 計	
	男 性		女 性		男 性		女 性		実習前	実習後
	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後		
服装	10	7	13	10	12	11	15	11	50(23.8%)	39(23.2%)
言葉遣い	11	7	14	9	14	15	18	11	57(27.0%)	42(25.0%)
健康管理	7	4	5	5	6	11	7	8	25(11.9%)	28(16.7%)
事前学習	9	4	9	7	5	6	8	7	31(14.8%)	24(14.3%)
人とのコミュニケーション	9	2	9	8	11	10	10	9	39(18.6%)	29(17.3%)
その他	1	1	1	1	1	2	1	1	4( — )	5( — )
未回答	1	1	3	—	—	—	—	—	4( — )	1( — )
合 計	48	26	54	40	49	55	59	47	210	168

違った点は、「服装」と「言葉遣い」であり、4人に1人(23～27%)が気を遣っている結果であった。反面、「健康管理」、「事前学習」、「人とのコミュニケーション」等には、あまり気を遣わない傾向があった。

＜自分の演習時の発言＞—表2c—

実習前と後で演習時の発言回数に変化が

あったかどうかの設問に対して、約半数の学生が「普通」と回答し、変化は認められなかった。

## Ⅱ. やや変化のあった項目

この群は、項目②学びたいこと、③病院・施設に対する気持ち、⑥自分の性格面の3項目である。

—表2c— 自分の演習時の発言

	演習Ⅰ（3年生）				演習Ⅱ（4年生）				合 計	
	男 性		女 性		男 性		女 性		実習前	実習後
	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後		
多い	2	—	—	1	2	2	2	1	6( — )	4( — )
少ない	8	5	12	7	5	4	4	3	29(33.7%)	19(30.2%)
普通	8	2	11	9	11	11	13	12	43(50.0%)	34(54.0%)
わからない	—	1	1	—	4	2	2	2	7( — )	5( — )
未回答	1	1	—	—	—	—	—	—	1( — )	1( — )
合 計	19	9	24	17	22	19	21	18	86	63

＜学びたいこと＞—表3a—

学生自身、学びたいことが明確であると回答した率は、実習前では86%、実習後92%で、実習後がやや増加している。

内容から比較すると、実習前の「学びたいこと」として、PSWの業務・役割、援助法、疾病理解、セルフ・ヘルプ、人権擁護、偏見をどうなくすか、社会復帰のプロセス、社会的入院、地域生活支援、など、教科書的、画一的な用語表現が多い。実習後は、PSWの仕事・役割の大切な視点、

精神に障害のある方の具体的生活のしづらさ、地域生活支援での連携、家族と社会復帰の現状、当事者の社会での暮らし方、講義との違いを学ぶ、障害者の就労・就学支援、など、実習現場での具体的状況の記述が多く、多様性があり、当事者・家族の立場に立って学ぼうとする態度がうかがえた。なお、病院・施設の状況を知る、当事者のニーズ・思いを知る、などは共通した回答内容であった。

—表3a— 学びたいことについて

	演習Ⅰ（3年生）				演習Ⅱ（4年生）				合 計	
	男 性		女 性		男 性		女 性		実習前	実習後
	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後		
明確である	14	8	21	16	19	18	20	16	74(86.0%)	58(92.0%)
明確でない	5	1	2	1	3	1	—	1	10(11.6%)	4( — )
未回答	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1( — )
「ある」だが内容未記入	—	—	1	—	—	—	—	1	1( — )	—
「ある」「ない」両方に丸	—	—	—	—	—	—	1	1	1( — )	—
合 計	19	9	24	17	22	19	21	18	86	63

## ＜病院・施設に対する気持ち＞－表3b－

統計上、1人が2～3の下位項目に複数回答しているが、下位項目、不安・緊張・怖さ・恐れ・関心・楽しみ・期待、等の中、変化のない項目と、やや変化が認められる項目とに分けられた。

変化のない項目は、恐れ・怖さ・楽しみ・期待、である。やや変化のあった項目は、情緒面で実習後に“不安”、“緊張”が実習前より2～3%低下し、一方“関心”が約4%上昇した。

－表3b－ 病院・施設に対する気持ちについて（複数回答）

	演習Ⅰ（3年生）				演習Ⅱ（4年生）				合 計	
	男 性		女 性		男 性		女 性		実習前	実習後
	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後		
不安	11	7	21	11	11	12	15	7	58(23.8%)	37(21.2%)
緊張	12	7	17	8	17	12	15	11	61(25.1%)	38(22.0%)
怖さ	3	1	5	2	—	—	3	—	11( 4.5%)	3( — )
恐れ	4	2	—	2	1	2	1	—	6( — )	6( — )
関心	13	5	12	9	13	14	14	16	52(21.4%)	44(25.0%)
楽しみ	9	4	3	4	6	6	6	4	24( 9.9%)	18(10.3%)
期待	8	5	6	4	7	8	8	6	29(11.9%)	23(13.2%)
その他	2	—	—	—	—	1	—	—	2( — )	1( — )
未回答	—	3	—	1	—	—	—	—	—	4( — )
合 計	62	34	64	41	55	55	62	44	243	174

## ＜自分の性格面＞－表3c－

心理面の自己評価チェックでもあるが、下位項目において実習後、“のんびり”、“おとなしさ”は2～5%減少傾向、“明るさ”、“小心”が0.6～0.7%増加している。変化のなかった性格面は“几帳面”で、実習前12.8%、実習後13.1%であっ

た。

## Ⅲ. 変化のあった項目

この群は、項目⑦事前学習、⑧一番学びたいこと（前）、学んだこと（後）、⑨自己覚知、の3項目である。

－表3c－ 自分の性格面（複数回答）

	演習Ⅰ（3年生）				演習Ⅱ（4年生）				合 計	
	男 性		女 性		男 性		女 性		実習前	実習後
	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後		
几帳面	3	2	3	3	7	3	4	6	17(12.8%)	14(13.1%)
のんびり	8	4	13	8	8	8	11	7	40(30.3%)	27(25.2%)
小心	6	5	7	6	6	6	5	3	24(18.1%)	20(18.7%)
明るい	4	2	7	6	4	6	10	7	25(18.9%)	21(19.6%)
おとなしい	5	3	5	1	5	6	4	3	19(14.4%)	13(12.2%)
その他	2	2	—	2	—	5	2	1	4( — )	10( 9.3%)
未回答	2	—	—	—	1	1	—	1	3( — )	2( — )
合 計	30	18	35	26	31	35	36	28	132	107

## &lt;事前学習&gt;一表4a-①

この項目は、実習前と後で設問を変えてある。実習前は「事前学習を（した－その内容－）、（しない）」であり、実習後は「実習中、予習・復習を（した－その内容－）、（しない）」である。

事前学習を「した」回答率は実習前

61.6%、実習中79.0%で、実習中の学習で高率を示した。反対に、「しない」という回答は実習前36.0%、実習中19.4%で、実習前が実習中より高率を示した。

具体的学習内容を自由記述から整理すると表4a-②のごとくである。

一表4a-① 事前学習・実習中の学習（予習・復習）の実行

	演習Ⅰ（3年生）				演習Ⅱ（4年生）				合 計	
	男 性		女 性		男 性		女 性		実習前	実習後
	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後		
した	9	5	13	16	13	13	18	15	53(61.6%)	49(79.0%)
しない	10	2	10	1	9	6	2	3	31(36.0%)	12(19.4%)
未回答	—	1	1	—	—	—	1	—	2( — )	1( — )
合 計	19	8	24	17	22	19	21	18	86	62

一表4a-② 事前学習・実習中の学習（予習・復習）の内容

実 習 前	実 習 中
<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料・報告書を読む</li> <li>・ノート・教科書を少し読む</li> <li>・事前レポート作成学習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対人関係（援助技術）の本を読む</li> <li>・精神医学用語の復習（病状・病名）</li> <li>・法律・制度を学習（年金、社会保障）</li> <li>・実習先資料・報告書・ノート・記録を読む</li> <li>・SST、アセスメント、ケアマネジメントの教科書を読む</li> <li>・薬の勉強</li> <li>・エコマップ、ジェノグラムの勉強</li> <li>・スタッフミーティングでの問題を自習</li> </ul>

実習前の学習は量、内容ともに乏しく、実習先の資料やパンフレットを読む、先輩の報告書を読む程度である。また、最近増加している実習先からの課題による実習前のレポート作成も学習に入っている。

一方、実習中に行われた学習は、バイステックの7原則等援助技術のための読書、実習中に出会った患者の方々の病状・病名・治療（薬物療法）などを精神医学の教科書、講義ノートなどで復習すること、社会資源、障害年金、社会保障制度などの法律の学習、SST、アセスメント、ホームヘルプサービス、ケアマネジメントなどリハビリテーション関連の学習およびターミナルケア、エコマップ、ジェノグラムに至るまで幅広く、多彩な学習を行っている。

<一番学びたいこと(前)、学んだこと(後)>

## 一表4b-①

実習前に学びたいことが「ある」の回答率は68.6%、実習後学んだことが「あった」数値は95.1%で、両者に明らかな差が認められた。

なお、実習前に学びたいことが「ない」という回答は、未回答と合わせると26.5%、4人に1人が学びたい内容が明確でないことになる。

学びたいこと（前）、学んだこと（後）の具体的内容を列記すると、表4b-②のごとくである。

—表4b-① 一番学びたいこと（実習前）・一番学んだと思うこと（実習後）の有無

	演習Ⅰ（3年生）				演習Ⅱ（4年生）				合 計	
	男 性		女 性		男 性		女 性		実習前	実習後
	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後		
ある	10	6	22	17	14	19	13	17	59(68.6%)	59(95.1%)
ない	7	1	2	—	6	—	1	—	16(18.6%)	1( — )
「ある」だが内容未記入	—	—	—	—	—	—	2	—	2( — )	—
「ある・ない」が未記入	—	1	—	—	2	—	—	1	—	2( — )
未回答	2	—	—	—	—	—	5	—	7( — )	—
合 計	19	8	24	17	22	19	21	18	86	62

—表4b-② 学びたいこと（実習前）・学んだこと（実習後）の内容

学びたいこと	学んだこと
<ul style="list-style-type: none"> <li>・PSWの役割</li> <li>・医療の実態</li> <li>・相談援助</li> <li>・コミュニケーションのとり方</li> <li>・患者理解</li> <li>・生活のしづらさ</li> <li>・ニーズへの対応</li> <li>・退院援助</li> <li>・施設・病院の現状</li> <li>・具体的援助</li> <li>・就労支援</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者さんの生活のしづらさと地域で暮らしたいという願い</li> <li>・患者さんの生活の悩み、苦しみ、良い面</li> <li>・援助の多様性</li> <li>・患者さんへの接し方と傾聴の実践</li> <li>・社会資源の活用と社会保障の勧め方</li> <li>・患者さんとの距離のとり方</li> <li>・患者さんからの能力の引き出し方</li> <li>・環境の大切さ</li> <li>・他職種との連携</li> <li>・病状理解と回復後の社会復帰の困難性に対するPSWの働きかけ</li> </ul>

実習前に比較し、実習後学生が「学んだこと」は、現場での具体的で実践的内容であり、個人差があつて多様性がある。反面、実習前は計画段階での画一的内容が中心であつた。

#### ＜自己覚知＞—表4c-①

日常、学生生活での「自己覚知」<sup>6)</sup>を尋ねた設問に対して、統計上、実習前に「あ

る」と回答した学生は50.0%で約半数のみである。ちなみに「ない」の回答は40.7%であつた。

実習後では、「ある」95.1%、「ない」3.2%で、実習前と後の自己覚知に対する認識に大きな差が認められた。

自己覚知の内容を具体的記述で整理すると、表4c-②のごとくである。

—表4c-① 日常の学生生活での自己覚知の有無

	演習Ⅰ（3年生）				演習Ⅱ（4年生）				合 計	
	男 性		女 性		男 性		女 性		実習前	実習後
	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後	実習前	実習後		
ある	4	5	13	17	13	19	13	18	43(50.0%)	59(95.1%)
ない	14	2	9	—	8	—	4	—	35(40.7%)	2( — )
「ある」だが内容未記入	—	—	1	—	1	—	2	—	4( — )	—
未回答	1	1	1	—	—	—	2	—	4( — )	1( — )
合 計	19	8	24	17	22	19	21	18	86	62

一表 4c-② 自己覚知の内容

実 習 前	実 習 後
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の性格傾向 優柔不断、依存的、怠慢、悲観的、 落ち込みやすさ、がんばり屋、心配症、 弱点の自覚、見方が一方的、など</li> <li>・ 自分の人間関係 会話による相手と自分意識、消極性、 緊張、苦手な人を避ける</li> <li>・ 自分の考え方・関心への気づき</li> <li>・ 秘密保持</li> <li>・ 不明確</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分のとりやすい言動傾向 狭さ、弱さ、あさはかさ、執着、消極性、積極性、人見知り、 考えすぎ、のろさ</li> <li>・ 患者・利用者との距離のとり方の困難性 巻き込まれ、共感のしすぎ、同一化、不慣れ、特定化、困惑と 反応の仕方、世代差の問題、守秘への束縛感、相手からの自分 意識過剰、自分の感情処理困難、自分の偏見への気づき</li> <li>・ 知識不足と視点の狭さ</li> <li>・ 指導者の評価への気にしすぎ</li> <li>・ 期限内提出書類、業務の難しさ</li> </ul>

実習前の「自己覚知」は、患者・利用者不在による自己認識に偏っていて、自分の性格、考え方・関心や人間関係に対する自己洞察である。

実習後の「自己覚知」は、患者・利用者との交流を通じて自分の性格傾向（自分のとりやすい言動）を理解し、患者・利用者との距離のとり方の困難性を認識し、自己統制（巻き込まれ、同一化、共感のしすぎ、感情処理など）への努力をするという傾向が認められた。

## 考 察

これまでの文献上、現場実習前における同種の学生の意識調査は、探し得た範囲では見出すことはできなかった。

本調査の結果を考察するにあたり、予めいくつかの限界があることは明らかにすべきであると思う。本調査が2002年度1年間の調査であること、回答率が実習前（94.5%）、実習後（74.1%）と差があり、後者の回答率が8割未満であること、および、統計上共分散分析のような処理を行っていないこと、などである。

しかし、アンケート9項目の単純集計の段階でも、その結果において、3グループ（変化のなかった項目、やや変化のあった項目、明らかに変化のあった項目）に分けられ、各グループは関連しつつも特徴があることが分かった。

ここに、その特徴を整理し、考察を加え、今後の実習指導指針を検討したいと思う。

## I. アンケート結果の検討

### 1) 「実習動機」－項目①－

筆者らは、かつて本実習に対する学生の動機づけについて調査し、報告<sup>12)</sup>した。その結果は、具体的現実的動機（主として資格取得目的）と学習的抽象的動機（社会復帰の遅れを知る、など）の2つに分けられ、前者は92%と高率であった。そのため、今回は具体的現実的動機を除いた実習動機について、回答を求めることとした。結果は、約3割弱の学生が、実習前・後を通して動機をもたないで実習に臨んでいることが分かった。

わが国の精神保健福祉士は名称独占資格であって、医療職（医師、看護師、薬剤師など）の業務独占資格に対して、その専門性に特有の技術、責任、使命が課せられている<sup>7)</sup>。現場実習は、そのことを学ぶ大切な機会であることを、事前にすべての実習参加学生に認識させる指導が必要であると痛感した。

### 2) 「学びたいこと」－項目②－

統計上の数値では、学びたいことが実習後に、前より明確になる傾向（前：82%⇒後：92%）を示した。しかし、実習内容の記述では、実習後にやや実践的具体的な社会復帰に関する課題を挙げているが、精神保健医療施設での課題はほとんどなかった。厚生労働省での実習指導目標には、「各専門職種による診断・検査方向・治療計画・目標の立て方を学ぶ<sup>8)</sup>」がその一つで

ある。精神科チーム医療のスタッフとして、PSWの果たす役割の重要性と、各専門職種間の連携の実践が、実習後の学生の学びたいことの課題に加えられない点を見ない方が良く考える。また、ワイスマン(Weissmans.)ら<sup>9)</sup>は、「21世紀における精神医学」において、重い精神疾患をもった患者への重要な社会的アプローチとして、SST、心理教育、「擁護的コミュニティ訓練」(ワイスマン)を挙げている。学生実習現場におけるこれまでのわが国の社会復帰に関する学習内容も発達、変化すべきであると思う。

3)「事前に気を遣った点」－項目④－「病院・施設に対する気持ち」－項目③－「自分の性格面」－項目⑥－

これまで、精神保健福祉援助実習現場では、多少とも学生に不安・緊張・怖さ・恐れなど、情緒面の反応が伴うとされていた<sup>9)</sup>。しかし、本調査の結果では、「怖さ」(実習前4.5%、実習後1.7%)、「恐れ」(実習前2.4%、実習後3.4%)と頻度が低く、特徴的な一定の傾向は示さなかった。

同様に、学生が事前に気を遣った点は、実習前・後を通じて服装と言葉遣い(3割弱)が最も高く、人とのコミュニケーションは実習前18%、実習後17.3%と低率で前後に変化がなかった。

むしろ、特徴的な点は、実習後に「不安」、「緊張」の情緒面、「のんびり」、「おとなしい」の性格面が低率となり、「明るさ」、「関心」が約4%上昇している。学生の学習への取り組みへの意欲、積極性、冷静さの表れと評価しても良いと思う。しかし、人とのコミュニケーションに対する関心のない傾向は、指導方針の課題として取り上げるべきであり、この点についての指導指針の検討は後述する。

4)「実習中に予習・復習をした」－項目⑦－

回答の肯定率は79.0%で、実習前61.6%より高く、その内容は、精神医学の知識に関すること、制度・法律などの学習が多く成されている。日々の実習上、必要に迫ら

れての予習・復習であることが推察される。

ここで、注目して取り上げたい点は、「対人関係(援助技術を含む)の本を読む」という学習が比較的多かったことである。本来この実習は、現場において、対人関係のみではなく、広く「社会的スキル」<sup>10)</sup>を学ぶ場でもある。まず気づきに始まり、置かれた状況によりいかに適切な行動をとるか、あるいは行動を変えるかなど、幅広い社会的スキルを学ぶ機会となる。

本大学では、2000年度よりロールプレイ演習をカリキュラムに取り入れているが、精神保健福祉士課程の場合は、質・量ともに幅広い「社会的スキル」の事前学習が必要であることを改めて認識した。

5)「一番学んだと思うこと」－項目⑧－「自己覚知」－項目⑨－

この2項目は、それまでの項目に比較して、実習前と後での肯定率に最も大差を示した項目である(表4b-①、表4c-①)。実習内容においても、項目⑧と⑨は、互いに関連性があり、学び、自己覚知したその共通点を整理して記述すれば、「患者・利用者とコミュニケーションにより、その悩み、苦しみ、接し方を理解した。同時に、患者・利用者との距離のとり方の困難を認識し、葛藤し、自己の人間関係の結び方を洞察したこと」である。人とのコミュニケーションとは、村田<sup>11)</sup>による「獲得していくという次元からの検討のみでなく、損なわれた時に起こる葛藤、挫折、失意などの心理状態の理解とその癒しの術を備えたものでなくてはならない」という学習であろう。

本実習においては、学生自身が自己のコミュニケーションの発達段階を認識し、その段階から自分自身で能力を育む努力が、実習現場では求められていることが推察できる。

これまでに、筆者らが、実習前と後の学生から得た行動・心理面における変化・発



達・成長したという印象は、一人ひとりの学生において個人差はあっても、この能力の発達が重要な要素となっていることは考えられるように思う。

## II. 実習指導のための指針

### 1) “社会的スキル”の事前学習

既にアンケート項目「実習中に予習・復習をした」の検討において、対人関係の学習にふれたが、事前教育として行う場合、どのような具体的指導法があるかを検討したいと思う。

菊地<sup>10)</sup>は、「会話を始める」という基本的スキルについて、「挨拶をする」「スモールトークをする」「相手の反応を見る」「本当の話題を持ち出す」という4つの行動を挙げている。

今回の意識調査の結果から、指導指針の一つとして、学生が実習場面で患者・利用者との距離のとり方に困難性を認識する以前の段階で、この「会話を始める」という基本的4行動の社会的スキルを体得しておくことは、「距離のとり方」を学習するためにはかなり役立つスキルであるように思う。

筆者らは、かつて本実習の開始当時、実習教育を模索していて、「専門職的感性の修得」の重要性に注目し、バISTEックの7原則<sup>12)</sup>による“感性教育”の試みを報告<sup>2)</sup>した。しかし、年度を重ねるに従って、実際には多くの学生が、理論としては学べても、実践の場で応用するまでには至らない現状であることも実感していた。

この意識調査の結果から、改めて感性教育にはいくつかの基本的・社会的スキルの修得後が必要なことを認識させられた。

相川<sup>13)</sup>は、社会的スキルは、「対人目標を手に入れるための手段である」とし、例えば、対人関係開始当初は「微笑み」から始めることであり、スモールトークは、簡単な自己紹介、天候、部屋の状況などについて話し始めることであり、その時、同時に、非言語的側面の気づきにより、相手の

反応を知ることになる、と説明している。実際に、会話を維持、発展させるスキルは次の段階になるという訳である。

なお、今回の調査で、学生の演習時の発言に変化が見られない(表2c)現状は、実習現場以外での“社会的スキル”段階の学習不足に関連していると考えさせられた。

### 2) 生物－心理－社会的統合モデルとチームアプローチの理解を高める

学生の実習時の「学びたいこと」、「学んだこと」の意識の中に他専門職種間のチームアプローチ(連携を深めた状況)が少ないことは、既に述べた通りである。近年、第二世代抗精神病薬の陰性症状への効果が認識され、また、精神保健及び精神障害者福祉に関する法律(精神保健福祉法)が明記しているように、今後の精神保健福祉がチームアプローチにおいて、ますます生物－心理－社会的統合モデルとして理解されなければならない時代が到来していることを考慮しつつ指導する方向が求められていると考える。(完)

## <註>

- 1) 小片富美子、宮崎まさ江、藤原正子「精神医療と福祉の連携に関する一試案—精神保健医療施設での学生現場実習結果より—」『長野大学紀要』第22巻第1号、2000年。
- 2) 宮崎まさ江、小片富美子、藤原正子「『精神保健福祉援助実習』教育のあり方に関する一考察—精神障害者社会復帰施設での学生現場実習結果より—」『長野大学紀要』第22巻第2号、2000年。
- 3) 日本社会事業学校連盟(第33回)・日本社会福祉士養成校協会(第2回)平成15年度全国社会福祉教育セミナーの第4分科会『社会福祉教育における精神保健福祉士養成の現状と課題』において、寺谷隆子(日本社会事業大学)、藤井達也(大阪府立大学)、新保祐元(東京成徳大学)の3報告者、池末美穂子(日本福祉大学)コーディネーターおよび参加者の論議により、実習をめぐる現状にはさまざまな状況と課題があり、現場、学生、大学、専門職団体(精神保健福祉士協会)などの有機的な連携のもと、ともに取り組んでいく必要があることの共通認識を得る機会となった。
- 4) 2003年12月、日本社会事業大学において、日本精

- 神保健福祉士養成校協会設立発会式が開催された。その目的は、精神保健福祉の向上及び精神障害者支援の担い手の確保及び資質の向上を行う精神保健福祉士養成校に課せられた社会的使命にかんがみ、精神保健福祉士養成校の教育の内容充実及び振興を図るとともに、精神保健福祉の専門教育に関する研究開発及び知識の普及に努め、もってわが国の精神保健福祉の増進に寄与すること、である。
- 5) 厚生省大臣官房障害保健福祉部精神保健福祉課監修『精神保健福祉士法詳解』ぎょうせい、1998年。
  - 6) 自己覚知 (self-awareness): 援助者 (ソーシャルワーカー) と援助を求める利用者との専門的援助関係において、援助者に求められる深い自己理解と自己統制のこと。社会福祉辞典編集委員会編集『社会福祉辞典』大月書店、2002年。
  - 7) 篠原由利子「実習の意義と目的」『精神保健福祉援助実習』久美、2003年。
  - 8) 精神保健福祉士養成セミナー編集委員会編集『精神保健福祉援助実習』へるす出版、1998年。
  - 9) 西園昌久「社会復帰段階のチーム・アプローチ」『精神医学』第42巻6号 pp.635-639、2000年。
  - 10) 菊池章夫「社会的スキルを考える」『教育と医学』第51巻10号 pp.4-10、2003年。
  - 11) 村田豊久「コミュニケーション問題の持つ複雑さ」『教育と医学』第47巻4号 pp.2-3、1999年。
  - 12) 福祉士養成講座編集委員会編集『社会福祉援助技術論』p.79、中央法規、1996年。
  - 13) 相川充「対人関係づくりの社会的スキル」『教育と医学』第51巻10号 pp.11-18、2003年。

## 〈資料1・実習前〉

## 精神保健福祉士実習に対する意識調査

学年 \_\_\_\_\_ 年 性別 男 ・ 女

[以下のアンケート項目にお答えください]

- ①実習動機（資格取得以外の）は明確で（ある ない）

\* 「ある」と答えた人のみお答えください。

どのような内容ですか（ )

- ②学びたいことが明確で（ある ない）

\* 「ある」と答えた人のみお答えください。

どのような内容ですか（ )

- ③病院・施設に対する気持ち（不安、緊張、怖さ、恐れ、関心、楽しみ、期待、

その他 [ ])

- ④事前に気を遣った点（服装、言葉遣い、健康管理、事前学習、人とのコミュニケーション、

その他 [ ])

- ⑤自分の演習時の発言（多い 少ない 普通 わからない）

- ⑥自分の性格面（几帳面、のんびり、小心、明るい、おとなしい、

その他 [ ])

- ⑦事前学習を（した しない）

\* 「した」と答えた人のみお答えください。

どのような学習をしましたか（ )

- ⑧一番学びたいこと（ある ない）

\* 「ある」と答えた人のみお答えください。

どのような事を学びたいですか（ )

- ⑨日常の学生生活で自己覚知が（ある ない）

\* 「ある」と答えた人のみお答えください。

どのような自己覚知がありますか（ )

どうもありがとうございました。

## 〈資料2・実習後〉

## 精神保健福祉士実習に対する意識調査②

学年 \_\_\_\_\_ 年      性別 男 ・ 女

[以下のアンケート項目にお答えください]

①実習動機（資格取得以外の）は明確で（ある      ない）

\* 「ある」と答えた人のみお答えください。

どのような内容ですか（      ）

②学びたいことが明確で（ある      ない）

\* 「ある」と答えた人のみお答えください。

どのような内容ですか（      ）

③病院・施設に対する気持ち（不安、緊張、怖さ、恐れ、関心、楽しみ、期待、  
その他 [      ])④事前に気を遣った点（服装、言葉遣い、健康管理、事前学習、人とのコミュニケーション、  
その他 [      ])

⑤演習時の発言（多い      少ない      普通      わからない）

⑥自分の性格面（几帳面、のんびり、小心、明るい、おとなしい、  
その他 [      ])

⑦実習中、予習・復習を（した      しない）

\* 「した」と答えた人のみお答えください。

どのような学習をしましたか（      ）

⑧一番学んだと思うこと（ある      ない）

\* 「ある」と答えた人のみお答えください。

どのような事を一番学べましたか（      ）

⑨自己覚知の点（あった      なかった）

\* 「あった」と答えた人のみお答えください。

どのような自己覚知がありましたか（      ）

どうもありがとうございました。